2009.12月号「龍馬旅」

海に託した龍馬の未来とは？

国際交易の拠点づくり ～海援隊が目指したもの～

日本という海洋国家の未来を見据えた龍馬の行動派、海援隊と亀山社中という二つの軸に支えられた大構想だった。

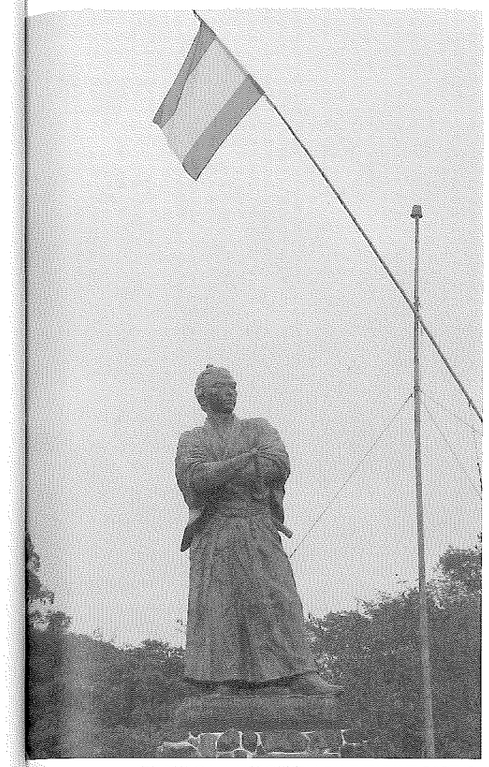
北海道龍馬会理事 菅場利通

国際貿易都市長崎で目覚めた究極の夢

龍馬の晩年は海外交易を目指し長崎を中心に奔走した。長崎は長年の鎖国政策の中でもオランダ・中国と交易を許され、唯一海外に開かれた貿易港である。蘭学はじめ自然科学を中心に医学・砲術・航海術などの西洋思想や諸技術をはじめとし生活・風俗・キリスト教など多方面で密度の高い異国文化の集積地であった。龍馬はこの地を訪れては交易で利益を得た豪商や外国商人との交流を重ねながら広く世界を見ていた。

一方、彼は薩長連合や大政奉還を経る中、あくまでも〝無血革命〟を唱え平和主義に徹した。新しい国家のあり方は侵略や防衛を旨とする軍事大国ではなく、自由・平等思想の下で国際貿易によって相互の国が豊かになれる〝経済立国の建設〟を果たすことを究極の〝夢〟とした。この点、その後明治政府が掲げた「富国強兵」と大きな隔たりがある。将に海援隊は「富国交易」を実現する具体的な活動組織であり、全世界を視野に入れていたことは「海援隊規約」から十分窺うことができる。

また、後世に於いては陸奥宗光の外交政治など国際領域で活躍する人材を育てる場でもあった。凶刃に倒れるその年、印藤肇と伊藤助太夫に宛てた龍馬の手紙によると「蝦夷地」と「竹島」の開拓は我々が想像する以上に急務で切実な課題だったことが解る。世界地理に詳しい龍馬であればこそ、北極圏を通過すれば蝦夷地はヨーロッパに最も近いことを知っていたであろうし、ロシアや北方圏諸国との貿易には蝦夷地拓が不可欠と確信していたに違いない。晩年に幾度も試みた蝦夷地開拓は並々ならぬ彼の情熱によるものである。



海援隊旗のもと長崎の港を見つめる風頭公園の龍馬像

目指すは蝦夷地と竹島の開拓

蝦夷地開拓の計画は元治元年（一八六四年）にはじまる。最初は黒龍丸で神戸から出発したが途中池田屋事件が勃発、望月亀弥太はじめ同志が殺害されたことにより幕府からの嫌疑を恐れて中止した。翌年、小松帯刀の協力でワイルウェフ号を購入、薩摩に向かう途中で沈没し池内蔵太はじめ亀山社中の者十二名が遭難。続いて慶応二年（一八六六年）、薩摩藩の保証でプロシア商人と洋帆船太極丸入手の手はずが整うが、資金難に見舞われ断念。

最後の計画は慶応三年、大洲藩から借り受けたいろは丸が明光丸（紀州藩）に衝突され沈没し、四度行われた計画はいずれも失敗に終わった。これらの目的には、時代の潮流にはぐれた若き下級武士たちを救済すべく〝新天地〟を求めたことも確かである。しかしながら、国際都市長崎を念頭に置いていた龍馬を思えば、同じく北の拠点としての国際貿易港〝箱館〟をこころの何処かで描いていたとしても不自然ではない。箱館を拠点にロシアはじめ北方圏諸国との交易を目論んでいたはずである。

また、一方では韓国や中国など隣国との足掛かりを竹島開拓に求めた。この発想は既に「国防」を唱えた吉田松陰にあって桂小五郎を通して龍馬に伝わったと見てよい。

もちろん、その先には東アジア諸国まで思いを馳せ、今日の「東アジア共同体」に通ずる経済圏を想定していたのかも知れない。

こうした龍馬の新鮮な国際感覚と勇猛な起業家精神の源泉は何処にあるのか？幼い頃に伊予（継母）との縁で廻船問屋を営む川島家を訪れた折、世界地図（新製輿地全図、天明十五年簑作省吾作）を見たり、長崎風説書を通して西洋事情に触れたことが〝夢〟の原点になったようである。

龍馬の北海道開拓の夢を受け継いだ人々

龍馬の死後、北海道への〝夢〟を引き継ぐ二人の甥たち（兄弟）が現れた。

ひとりは坂本家の家督を継承した龍馬の姉千鶴の長男、高松太郎（甥）である。後に龍馬の養子となり坂本直と改名。慶応四年、朝廷が箱館裁判所を設置した折、高松太郎（当時二十七歳）改め小野淳輔に箱館在任の命が下る。

やがて清水谷公考が箱館府知事に就任。太郎は海援隊時代に龍馬が説く蝦夷地開拓の重要性を京都で清水谷に解いた経緯があったので彼に見込まれた。

その後外交掛、生産方、刑法方、勘定方を兼任する中、蝦夷地開拓の建白書を上申するまでに至る。箱館戦争後、新政府は開拓使を設置、蝦夷地を北海道に改め本格的な本道開発に乗り出す。だが、開拓次官に昇格したばかりの清水谷は突然に辞職、これに伴い太郎も箱館を去った。高知に帰り晩年はキリスト教の布教に心血を注いだ。

もうひとりは、太郎の実弟にあたる高松南海男である。坂本本家を継ぎ直寛と改名。明治十八年、三大建白運動に参加した自由民権運動の指導者のひとりでキリスト教の伝道にも深く関わった。明治三十年、農民団体・北光社を率いて北見へ入植。その後、浦臼の聖園農場へ移り、さらにはキリスト教の新聞社主筆となり伝道者として活躍した。後年、兄坂本直の妻である留（高知在住）が直寛を頼って浦臼に來望した。

現在、浦臼には留と息子の直衛の墓が建っている。

六花の森　坂本直行記念館　（写真提供：坂本直行記念館）

坂本直行記念館は、彼の作品を展示している趣ある美術館。開拓農民として酪農を営むかたわら、坂本直行は十勝の雄大な自然を描き続けた。キャンバスには、刻一刻と移りゆく自然の表情を見事に切り取り、鮮やかに描ききっている。また、デッサン館では，花と山を描いた作品を展示している。アクセスは中札内美術村から六花の森までは約4km、車で10分ほどの距離。草花でいっぱいの広大な敷地の中に佇む（TEL：0155-68-3003）。